

一人一人が未来の創り手となる豊かな学びの創造

— 宇城市立松橋中学校保健体育科における「問い」と「振り返り」の工夫を通して —

指導主事 塩村 勝正

研究協力員 宇城市立松橋中学校 教諭 松川 紘士

1 はじめに

これからの社会は国際化等に伴う価値観の多様化がますます進むと考えられる。その一方で、持続可能な社会の実現のために解決すべき現代的な諸課題が山積している。

これらの課題解決のために、保健体育においては、運動や保健についての自他の課題を発見し、合理的な解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養うことが必要であると考え。

本実践では、攻防の楽しさや喜びを味わいながら先人が行ってきた運動文化に触れ、体育分野による「見方・考え方」を働かせ、生徒同士の関わり合いの中で個人の気付きを出し合いながら、課題解決を図っていく。

2 研究の視点について

(1) 視点1『「見方・考え方」に着目した問いの工夫』について

体育科の見方・考え方については、新学習指導要領解説保健体育編において、次のように示されている。

「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること」

このような体育の「見方・考え方」を働かせ、目標を達成するためには、まず、生徒が出会った運動を「やってみたい」「できそうだ」といった向上心を高めることが大切である。

また、「なぜ、どうしたら」など、生徒が運動や自己及び他者と関わり合いながら取り組むための必然性のある「問い」の設定が必要であると考え。このことで、試行錯誤しながら多様な他者と協働していく学習活動の充実が図られると考える。

剣道の学習においては、多くの学ぶべき概念（視点）があるため、どこに焦点を当てればよいのか分りにくい。そこで、単元を貫く問いにつながるよ

う「気剣体の一致」と「残心」に概念（視点）を絞り学習を進めることとした。

経験が浅い生徒にとって竹刀や体の捌きを瞬時に観察していくことは難しい。そこで、視覚によりイメージが持てるように技能ポイントを動画やイラストで提示することとした。

(2) 視点2「学びを実感する振り返りの工夫」について

学習活動を通して、生徒が自身の成長を実感し、新たな活動につなげることができるようになるためには、振り返りの工夫が必要である。

そこで、生徒たち自身が自分の動きの変容に気づきメタ認知を高めながら取り組めるように、協働的な学習場면을適宜設定し、学びの価値（意味）を理解させるようにした。その際、教師が生徒をしっかりと見取り、生徒の発する言葉に敏感になりながら、適切な場面で学びのよさを価値付けるようにした。

また、学習カードへの記入においては、「深く心に残ったこと」「友達へのアドバイス」「技能の習熟状況」など、振り返りの視点を明確に示すこととした。

さらに、学びをより実感するために、本時の学びが明確に現れている場면을提示し、可視化による振り返りも行った。

3 研究の実践

検証授業 中学校第2学年

単元名 武道（剣道）

(1) 本単元の授業設計

① 実態から

全体的には全国平均値をやや下回る体力の状況であるが、授業に対しては真面目に取り組む生徒が多い。学習活動におけるグループ学習等の協働的な学習場面においては、自分及び仲間の課題に対して的確なアドバイスができる力は十分定着していない。

技能を高めるために必要な知識や練習法等を学習しつつ、考えを相手に説明したり、聞いたりしながら、自分の考えをより質の高いものにしていくとい

う協働的な学びを意図的に引き出す学習を目指して
いきたい。

② 単元観

本単元は、学習指導要領〔体育分野〕F 武道の内容である剣道の持つ文化に触れることや単元を貫く問いを設定し、課題解決に向け、仲間と関わり合いながら攻防の楽しさや喜びを味わうことをねらいとする。

剣道は、武技、武術等から発生した我が国固有の文化であり、積極的に取り組むことを通して、武道の伝統的な考え方を理解し、相手を尊重して練習や試合を行うことを重視する。また、竹刀を使って、基本となる技や獲得した得意技を用いて相手と攻防を展開する中で、互いに「有効打突」を目指して複雑に変化する相手の動きに対応し、「一本」を決める喜びを味わうことができる運動である。

(2) 単元の目標

剣道という伝統文化に触れ、相手の動きに応じた基本動作から、打ったり受けたりするなどの攻防を展開することができる。

(3) 単元計画

時	学習活動
1	1 オリエンテーション（見通しを持つ）
4	2 剣道具の着脱、剣道具の正しい使い方を覚える。
	3 基本の技（小手、面、胴）を学習する。
	4 二段の技、引き技を学習する。
	5 約束稽古や簡易試合を行い、一本を取るために何が必要か、課題をつかむ。
4	6 判定試合の流れや方法を理解する。
	7 判定試合を行い、自己や仲間の課題を見つけ、互いに指摘しあいながら、技能向上に向けて学習する。（面）
	8 判定試合を行い、自己や仲間の課題を見つけ、互いに指摘しあいながら、技能向上に向けて学習する。（胴）
	9 判定試合を行い、自己や仲間の課題を見つけ、互いに指摘しあいながら、技能向上に向けて学習する。（面抜き胴）
1	10 学習して高まった技を用いて、簡易試合に取り組む。

(4) 研究の視点

〔視点 1〕

- 向上心を持たせるオリエンテーションの充実
- 必然性のある単元を貫く問いの設定
- 2つの概念（視点）を中心とした課題解決学習
- 技能ポイントの提示

〔視点 2〕

- 自分の動きの変容に気付かせる協働的な学習場面の設定
- 学習カードによる明確な振り返り
- 動画による明確な振り返り

(5) 授業の実際

①視点 1

ア 向上心を持たせるオリエンテーションの充実

一人一人に「やってみたい」「できそうだ」といった向上心を持たせ剣道の攻防の面白さを味わわせるために、竹刀を用いたシンプルなゲームや類似運動を使った体づくり運動を実施した。

また、授業に見通しを持たせ、本単元を通して何を目指し、どこまで高めるのかを確認した。

イ 必然性のある単元を貫く問いの設定

生徒との話合いの中で、単元を貫く問いを「試合で一本を取る技に高めていくためには、どのようにすればよいだろうか」と設定した。毎時間の導入部分において常に問いかけ、その日の授業のめあてを確認した。このことで、生徒がどんな活動を行う場合でも一貫した到達目標を持って活動に取り組むことができていた。

ウ 2つの概念（視点）を中心とした課題解決学習

第2時より、「気剣体の一致」と「残心」の2つの概念（視点）に絞り、課題解決に向けた学習活動に取り組ませたことで生徒は、この概念を基点とし、声の出し方、姿勢、間合い、体の捌き方、攻撃後の姿勢等について関わり合い、それぞれの事をつなげて考えられるようになり、納得のいく判定や振り返りができていた。

抜き胴の学習では、「間合いをもっと空けて」「間合いが近い」というアドバイスが多く出されていた。しかし、判定試合を撮影した動画で確認をさせると次のような気付きが出された。

踏み込み足をもっと右側に出すと、物打ち（竹刀先端10cmの部分）で胴を打てるんじゃないかな。

このように、多くの生徒が「間合い」に着目する中、撮影した動画を見たグループでは、「踏み込み足を出す方向」といった新たな気づきが得られた。

エ 技能ポイントの提示

動画やイラストによる技能ポイントの提示を行い、動きのイメージを持たせた。

判定試合や関わり合いの際、上手く説明できない場面があったが、生徒は動画やイラストを媒介しながら技能ポイントを説明し、判定試合を行った両者に納得のいく判定（説明）ができるまでになった。

②視点2

ア 自分の動きの変容に気付かせる協働的な学習場面の設定

本実践では、「見方・考え方」を働かせながら、関わり合いを通して、自分の動きの変容に気付かせながら資質・能力を育てていった。



単元後半における技を高めるためのペア学習、判定試合によるグループ学習において、生徒は、単元を貫く問いと2つの中心概念（視点）を念頭に置きながらお互いの気づきを出し合う姿が随所に見られた。グループ学習では、以下のような関わり合いが数多く見られた。

生徒Aが胴打ちの試技を行うのを生徒B、C、Dが観察する。生徒Aの試技は、剣先が物打ちに当たらず、詰まった打ち方となる。

生徒A：やべっ。どこに当たった？

生徒B：ここら辺（胴着の上部）。

生徒C：（踏み込む場所が）近い近い。

生徒A：もっと距離とらん。

生徒D：間合いをとった方がいいね。

生徒A：分かった。（納得）

さらに、教師が動画撮影したものをリアルタイムに確認したり対話と動きの修正を交互に繰り返しながら学習したりしたことで、自分の知らなかった動

きに気付きよりスムーズな動きに変化していった。

学習カードの記述には「A君は、とても踏み込みが強く、素早いので真似しようと思った。」「Bさんと試合をして後ろではなく、前に来られたので打ちづらくていい方法だなと思った。いつか使いたい。」等の感想が出され、友達との関わり合いの中から自分にはないものや自分の今の動きを冷静に把握し、練習方法を考える等メタ認知の向上にもつながった。

イ 学習カードによる明確な振り返り

学習カードの項目を次のように技能面に絞り、良かった点、課題点とその改善策、仲間の動きを観察しての気づきについて各自の振り返りを行った。

回	技能○	技能△	対策	なかまへの気づき
例	剣：面は物打ちで相手に打ち込むことができた	体：胴を打ち込む時の姿勢が前のめりになっていた	体：姿勢を崩さないように、相手から視線を外さずに打っている	□□くんの胴打ちは、右に大きく踏み込んでいて、物打ちでとらえていた。

仲間からのアドバイスや気づきを自分の○（良い点）や△（改善点）と捉え、学習カードへ記述することで振り返りの質を充実させることを目的とした。生徒の評価には、次のことが記述されていた。

- ・胴を打つときに斜めからではなく横から打ってしまった。
- ・足の動きと打つ時の音が合っていなかった。
- ・Aさんは、姿勢がよく自分が打ちやすい間合いを取っていてすごいと思った。
- ・C君のアドバイスで引き面の後の残心ができるようになった。

学習カードに自己の技能の評価と仲間の評価を記述したことで、「生徒が何につまずいているか」「友達をどう観察しているか」「仲間がどのようなアドバイスをもらっているか」等が分かるようになった。

ウ 動画による明確な振り返り

教師が、学習途中に撮影したもののの中から本時の学習のポイントとなる場面を提示し、その課題解決方法を確認させ、知識



や思考の向上を図った。

(6) 検証結果と考察

① 学習アンケートより

表1は、実践の前後に調査した質問紙調査の結果の一部である。特に事前事後との有意な向上が見られた項目は下記である。

表1 「学習に関するアンケート」結果より抜粋 (n=38) 4件法

有意確率**<0.01 *<0.05

項目	質問	事前	事後	差
3	自分は、〔保健体育〕の学習で、どのように活動を行うのか、見通しを持って学習に取り組んでいる。	2.74	3.13	0.39*
12	自分は、〔保健体育〕の授業の中で、これまでの学習を生かして、学習内容をより深く理解している。	2.66	3.08	0.42**
13	自分は、〔保健体育〕の授業の中で、自分や友達の考えのもとになる根拠を大切にしている。	2.92	3.21	0.29

項目3の要因は、単元計画を分かりやすくシンプルなものにし、学習の流れを毎時間提示したことにより、生徒が、ねらいの達成のために本時で「何を」「どのように」行っていけばよいか見通しを持って取り組むことができたと考える。項目12の要因は、本単元の中心概念を「気剣体の一致」と「残心」と位置付けたことにより、各時間で学んだ概念（技能及び知識）が中心概念に沿っているのか常に意識され、概念と概念がつながっていったことで、内容を深く理解できたと考える。項目13に関しては、ペアやグループ活動での関わり合いが大きな要因となったと考える。技能の楽しさや喜びを軸に動きの質を高めるための必然性を持たせた関わり合いを毎時間取り入れたことで、自分の動きのこれまで知らなかった面に気付くことができたと思われる。

② 学習活動から

攻防の楽しさや喜びを味わわせるために、導入で取り入れたシンプルなゲーム等は、学習時の見取りから「面白い」「(失敗しても)もう一回お願い」等声が聞かれ、生徒の「できそうだ」といった向上心

につながったと思われる。

概念（視点）を「気剣体の一致」と「残心」の2つに絞ったことは、そのことを基点とし、関わり合う内容が精査され、対話の質が変化していったとともに一つ一つの学びがつながられていった。単元初めに「よかった」とその理由が言えなかった生徒も「タイミングと間合いがよかった」「物打ちがまだしつかりと当たっていなかったからできていない」「残心があった点がよかったよ」等の根拠を示しながらの対話ができるようになっていた。

学習の振り返り場面での学習カードを使つての自己評価では、生徒が記述した内容を分析した結果からも学習が進むにつれ、ポイントとなる声、打突部の位置、間合い、体の捌き方や姿勢等の記述の出現率が増し、これまでの学びを関連付けて学習していることが推察された。その記述は、学習が進むにつれて教師が学ばせたかった「気剣体の一致」「残心」に向かって綴られていたことから、指導と評価の一体化が図られていたと思われる。また、この結果から、生徒がどのように見方・考え方を働かせて取り組んでいるのかその関係性が分かってきた。

毎時間のまとめの時間に本時の中心となった動きの動画を見て振り返らせたことは、自己の動きをしつかりと振り返る媒介となった。

4 研究のまとめ

視点1では、オリエンテーションや単元を貫く問い、概念（視点）を2つに絞ったこと等の工夫により、生徒の向上心の喚起充足や見通しを持った学習の展開を図ることができた。また、視点2では、関わり合いを通しての自分の動きの変容に気付かせたことや学習カード等の振り返りの工夫により、生徒のめあてに即した学びの足跡を残すことができた。

課題としては、生徒の関わり合いの場における対話の様子が十分把握できず、適切な指導ができていないことがあった。また、「見方・考え方」を働かせることについて生徒と教師の評価項目についての感じ方の違いがあった。今後、解決策を考え他の体育学習の中で確かめながら研究を進めていきたい。

《引用・参考文献》

・文部科学省(2017)「中学校学習指導要領解説 保健体育編」